

子どもはなぜサンタクロースを信じ、 やがて信じなくなるのか？

— 大学生による回想報告をもとに —

富田 昌平*

**Why do children believe Santa Claus and stop believing finally? :
From the recollection report by college students**

Shohei TOMITA

要 旨

本研究では、子どもはなぜサンタクロースを信じ、やがて信じなくなるのかについて、大学生を対象とした回想的な質問紙調査により得られた事例をもとに考察を行った。その結果、以下のことが示唆された。子どもは幼児期の間にプレゼントにまつわる神秘的体験をもとに超自然的な力を持つ行為者としてのサンタクロースの概念を明確にしていく。幼児期の終わりから児童期中頃になると、子どもは論理的思考力や懐疑主義を身に着けるようになり、サンタクロース神話をめぐる数々の矛盾点に疑いの目を向け、それらを見破るようになる。具体的には、プレゼントの隠し場所や包み紙に関する見破り、プレゼントを置く瞬間の目撃、サンタクロースへの手紙の発見、手紙やプレゼントの内容に対する疑惑などが挙げられる。また、親や年長のきょうだい、友達からの証言もサンタクロースに対する不信に拍車をかける。そのようにしてサンタクロースを信じなくなる一方で、サンタクロースを信じようとする心も併せ持っており、子どもの心は両者の間を揺れ動いている。従って、親をはじめとする大人がそうした子どもの揺れ動く心にていねいに寄り添い、誠実に対応することがこの時期大切なこととして考えられる。さらに、「サンタクロースは本当はいない」という真実を知った時、子どもは怒りや悲しみ、憤りなど様々な感情的反応を示すが、大切なのはその時その瞬間ではなく、その後それをどのように意味づけ、振り返るかではないかと考察された。

キーワード：サンタクロース、信念、認識発達、感情発達、子ども

問題と目的

子どもはなぜサンタクロースを信じるのであろうか。また、なぜやがて信じなくなるのであろうか。この問いは、おそらく多くの大人たちにとって共通の極めて魅力的な問いであろう。子どもの頃にいつ頃までサンタクロースを信じていたかという話は、たとえ初めて会った者同士でもすぐに打ち解けて、話に花を咲かせることのできる、いわば魔法の話であるとかつて聞いたことがある。それほどまでにサンタクロースにまつわる話は私たち大人にとって共通に扱うことのできる話題であり、子ども時代の心躍る出来事として記憶の

奥深くに刻まれた話題であるといえよう。

サンタクロースは多くの謎をその身にまとっている。例えば、サンタクロースとトナカイが引くそりはなぜ空を飛ぶことができるのか、たった一日でどうやって世界中の子どもたちにプレゼントを配ることができるのか、大量のプレゼントはどこでどうやって用意しているのか、どうして子どもたち一人ひとりの欲しいものがわかるのか、煙突もない鍵のかかった家にどうやって入ってくるのかなどなど、数え始めるときりがない。

しかし、発達的に振り返ってみると、4歳頃までの子どもにとって、その謎は謎ですらないかもしれない。Baxter & Sabbagh (2003) は、クリスマスのアニメ

* 幼児教育講座

映像を4歳児と8歳児が親と一緒に視聴した時、どのような疑問を口にするかを分析した。その結果、8歳児では、「一晩で世界中を回れるのはどうして？」など、サンタクロースの謎に関する質問が多かったのに対して、4歳児では、「サンタの奥さんってどんな人？」など、サンタクロースの人となりについての初歩的な疑問を口にするが多かったことを報告している。4歳頃までの子どもにとってサンタクロースとはそもそもそのような人物であり、たとえ不可解なことがあったとしても、彼らにとって言葉を話すウサギや空を飛ぶ魔女、火を噴くドラゴンが存在する (Samuels & Taylor, 1994; Taylor & Howell, 1973) のと同じように、世界のどこかにはそのような人物がいたとしても何ら不思議ではないと考えているのかもしれない。

5、6歳頃になると、子どもはサンタクロースの謎を謎として受け止めることができるようになる。富田 (2009) は、この時期になると、子どもは昼間に保育園や幼稚園、近所のスーパーなどで会うことのできるサンタクロースよりも、夜中にトナカイが引くそりに乗って空を飛び、時にサンタの国に連れて行ってくれるサンタクロースの方がより「本物」であると考えようになることを報告している。つまり、「本物」のサンタクロースには謎めいた、超自然的な要素が不可欠であり、そのことを彼らはすでに知っているのである。

また、この時期の彼らは恐怖や不安のようなネガティブな感情を喚起させる出来事に対して「あり得ない」と手厳しいが、喜びや幸福のようなポジティブな感情を喚起させる出来事に対しては「あり得る」と好意的であることも示されている (Carrick & Quas, 2006; Carrick, Quas, & Lyons, 2010)。ゆえに、彼らはたとえサンタクロースから奇妙で不可解な点がいくつも検出されたとしても、その喜びや幸福をもたらす要素から、その存在を「あり得る」と信じるのかもしれない。

もちろん、親を中心とした環境のサポートも見逃せない。サンタクロースは私たちの文化の中ではクリスマスという一大イベントの中心人物として存在し、親やまわりの大人たちはそのイベントに熱心に従事している。クリスマス・ソングを口ずさみ、ツリーを部屋に飾り、ケーキを食べ、パーティーをし、子どもと一緒にサンタクロースに手紙を書き、靴下をつるしたりする。サンタクロースと称して手紙の返事を書いたり、子どもと電話で話したり、ひそかにプレゼントを用意して、クリスマス・イヴの夜に子どもの枕元に届けたりする (Prentice, Manosevitz, & Hubbs, 1978; Prentice & Gordon, 1986)。こうしたクリスマス行事への熱心な参加や物理的証拠の存在のかいあって、子どもの多くは多少の不可解な点にも目をつぶり、サン

タクロースの存在を信じ続ける (富田, 2002)。

やがて9、10歳頃になると、子どもはサンタクロースに対して明らかに疑いの目を向けるようになる。彼らは学校教育で身に着けたばかりの現実的で合理的で科学的な思考法を武器にサンタクロースの謎と向き合い、真相に迫っていく。そうしてついには、サンタクロースとはそもそもつくられた物語であり、現実には存在しない、架空の人物であることに気付くようになる。Rosengren, Kalish, Hickling, & Gelman (1994) は、学校に入学すると、子どもの魔法やファンタジーに対する態度は懐疑的なものになると指摘している。それは学校という社会的文脈がもたらすものであり、そこでは合理的で科学的な思考は奨励され、ファンタジーはたまにする読書や遊びの中に限定されるようになるという。

しかし、サンタクロースの物語は一度拒絶された後、再び広く受容されるようになる。サンタクロースを信じなくなった後の子どもの反応についてインタビューした Kowitz, & Tigner (1961) の研究によると、サンタクロースが実在しないと気づいた最初の頃、子どもは失望をあらわにし、自分を騙した大人の仕打ちに対してひどく感情的な反応を示すが (「ママとパパはうそつき」など)、次第に幸福をもたらす行事としての機能に目を向け始め (「毎年クリスマスの日ですてきな願いごとをもたらす魂そのものことなんだ」など)、その後、サンタクロースを一つの神話として再受容し、生活の一部として位置づけるようになるという。

以上のように、幼児期から児童期におけるサンタクロースに対する認識の発達的变化は、これまでの数多くの先行研究において明らかにされている。しかし、実際により具体的に、子どもはサンタクロースにまつわるどのような体験をしているのか、なぜサンタクロースを信じ、やがて信じなくなるのか、子ども時代のサンタクロース体験は彼らに何をもちたらすのかの詳細については、十分に明らかにされていない。そこで本研究では、大学生を対象とした回想的な質問紙調査によって、その点について検討する。

方 法

被調査者

Y短期大学保育学科2年生76名 (男性3名、女性73名; 年齢範囲19~23歳)。

手続きと質問内容

「発達心理学Ⅱ」の授業時間内に質問用紙を配布し、その場で記入を求めた後、回収した。質問は以下の通り。質問1: あなたは何歳頃までサンタクロース

の存在を信じていましたか？ 質問2：幼稚園・保育所の子どもが「サンタクロースって本当はいないの？」と聞いてきたら、あなたは何と答えますか？（いるよ／いないよ／さあ、どうかね／その他）質問3：あなたの幼児期・児童期におけるサンタクロースにまつわるエピソードについてお聞かせください。

実施時期

2001年5月と2003年5月。

結果と考察

量的分析

サンタクロースをいつ頃まで信じていたかという質問（質問1）に対する回答は、幼児期（11%）、小1（11%）、小2（24%）、小3（13%）、小4（17%）、小5（0%）、小6（4%）、中学（3%）、今でも信じている（8%）、最初から信じていなかった（11%）という結果であった。最初から信じていなかった者11%を加えると、幼児期の終わりまでに21%の者がサンタクロースを信じなくなることが示された。その後、小学校入学から最初の3年間で信じない者は着実に増加し（32%→55%→68%）、小学校4年生になると86%に達することが示された。

子どもに「サンタクロースって本当はいないの？」と聞かれたらどう答えるかという質問（質問2）に対する回答は、「いるよ」（64%）、「いないよ」（1%）、「さあ、どうかね」（32%）、「その他」（3%）という結果であった。大部分が肯定か、もしくは肯定も否定もしないという回答であり、否定すると回答した者は1名のみであった（回答者は質問1で「最初から信じていなかった」と回答した者であった）。その他と回答した場合も、「その子がどう思っているかを聞き、答える」など、子どもの現在の状態に任せるというものであった。

質的分析

子ども時代のサンタクロースにまつわるエピソード（質問3）に関しては、2名（「特にありません」、無回答）を除く74名分の記述が得られた。以下では、得られたエピソードを大きく「超自然的体験」「矛盾の見破り」「他者の証言」の3つに整理し、子どもはなぜサンタクロースを信じ、やがて信じなくなるのかについて事例をもとに考察していく。なお、事例のカッコ内は信じていた年齢を表している。

超自然的体験：サンタクロースの存在を信じていた理由として多くあげられる回答の一つに、プレゼントをもらった体験がある。受け取り方は様々であり、大きくは次の3つにまとめられる。①朝目覚めると枕元にプレゼントが置かれているのを発見する、②物音

がした場所に行ってみるとプレゼントが置かれているのを発見する、③サンタクロースの格好をした人物や代理人と称する人物から直接プレゼントをもらう。このうち①と②は信念形成のエピソードとして語られることが多く、他方、③は不信形成のエピソードとして語られることが多かった。事例1は①の記述例、事例2と3は②の記述例である。

【事例1】私がまだ小学生の頃、クリスマスの朝に目をさますと、枕もとにお菓子の包みとサンタクロースの長靴が置いてありました。すごくうれしくて「お父さん、お母さん、見て見て！！」と言ったのを覚えています。（小6まで）

【事例2】幼稚園の時、クリスマス日に家族みんなでテレビを見ていると、父がいきなり「あら？今、何か玄関の方で音がしたぞ。もしかしたらサンタさんが来たのかな」と言ったので、ドキドキしながら玄関に走って行った。ドアを開けるとそばにプレゼントが置いてあった。私は「近所のおばちゃんでは？」と思い、父や母や兄に「野上のおばちゃんじゃない？」と言ったが、「野上のおばちゃんがくれるわけないだろう」と言ったので、サンタは本当にいるのだと思った。しかも、前から欲しかったリカちゃん人形だったので、とてもうれしかった。（小2まで）

【事例3】クリスマスの夜に家族全員で外食に行った。家を出るとき、一番最後に家を出たのは僕だったが、プレゼントは確かになかった。外食を終えて家に帰り、僕が家の鍵をあけて一番に入る。すると、なんと机の上にプレゼントがあった。

後になって、どうやってやったのか親に何度聞いても教えてくれなかったことを覚えている。最近になって、このクリスマス・プレゼントのトリックを久しぶりに親に聞いてみた。すると、忘れ物をとりに家に戻ったときに、プレゼントを家において、そして外食に出かけていったらしい。親もいろいろと考えていたのだなあとと思った。僕も将来、このような手を自分の子どもに使おうと思っている。（小4まで）

いずれもプレゼントの受け取りを契機とした信念形成のエピソードであるが、特に後者のケースでは、その過程において巧妙なサプライズ演出がどのようにして行われたのかについて、回想法特有の後日談とともに語られている点の特徴である。

また、もらったプレゼントの中身がまさに今自分が欲しいものだったり、プレゼント受け取りの過程において本人が何らかの努力や願いごとを積み重ねていた

場合なども、子どもの信念はより高まるようである。

【事例4】クリスマスの朝、枕もとに私が駄々をこねて結局買ってもらえなかったものがたくさん置いてあり、私の欲しいものばかりどうしてわかったのか、とても不思議だった。そして、私をいつもからかっていた兄にはプレゼントが少ししかなく、サンタは本当にいるんだなぁと思った。(幼児期まで)

【事例5】何歳の頃かよくわからないけれど、幼稚園の宿題のようなものでお手伝い表があって、それにいっぱいシールを貼れたら「サンタさんが来るよ」と言われ、一生懸命頑張った覚えがあります。そして、神棚があるところに向かって、「〇〇が欲しいです」と毎日言っていました。クリスマスの朝、起きてみると、欲しかったものがちゃんとピアノの上にあって、とてもうれしかったです。(小3まで)

事例4の「とても不思議だった」という言葉からもうかがえるように、子どもにとって今まさに欲しいものの中身は本人しか知り得ない情報であり、にもかかわらずそれが知られたということは、何か超自然的な力がそこに働いた可能性を示唆する。誰ならばそのようなことが可能なのか？それはサンタクロースだ！と子どもなりに推論を働かせることで、信念はより高まったのかもしれない。事例5でも同様に、子どもは欲しかったプレゼントをもらえたという成功体験とサンタクロースの存在とを結び付けている。欲しいものと思い描きながら、それが現実になることを信じて一生懸命努力する、お祈りをする。その過程を誰かがどこから見ていて、その結果、見事願いが叶えられる。いったい誰ならばそのようなことが可能なのか？サンタクロースに違いない！とそう推論したのではなからうか。

最近の研究において、Bering (2011) は、人間には、自然の出来事を見るときに、その出来事以上のものを見てしまう傾向があると述べている。彼はプリンセス・アリス実験と呼ばれる実験において、そのことを明らかにしている (Bering & Parker, 2006)。実験では3~9歳の子どもは、2つの箱のうちのどちらにボールが隠されているかを当てるゲームに参加したが、そのゲームを行う前に「プリンセス・アリス」という名の不思議な力を持つ親切なお姫様の話を聞かされた。彼女は目に見えないけれど部屋の中において、子どもが間違った箱を選ぼうとすると、何らかのやり方でそのことを伝えようとするという。具体的には、子どもが正解と思った方の箱の上に手を置いた瞬間に、壁にかかった絵が落下したり、ランプが点滅したり、予期せぬ出

来事が起こった。実験の結果、興味深いことに、3~6歳の子どもはそうではなかったが、7~9歳の子どもは予期せぬ出来事に反応して自らの答えを変える選択を多く行った。こうした結果から、Bering は、年長の子どもは特別な超自然的な行為者という概念を想定して、自然の出来事の中に伝達的なメッセージを見てとるといふ、大人にも同様に見られる傾向をすでに備えていると述べている。そして、そうした概念は文化を通じてより強められていくのだと述べている。本研究で取り上げたいいくつかの事例においても同様のことが言えよう。子どもは超自然的な力を持つ存在としてのサンタクロースの概念を確立していくに従って、通常では起こり得ないような出来事もサンタクロースの存在があれば可能であると考えられるようになるのである。

ところで、これらの体験は驚きや喜び、興奮、感動といったポジティブな感情とともに語られることも特徴の一つとして挙げられる。他方、子どもによるプレゼント受け取りプロセスに何らかの不備があり、それによりサンタクロースの存在に対する疑惑や失望が時に子どもの心の中に生じたというケースもある。例えば、保育園や幼稚園のクリスマス会で出会う大人が扮装したサンタクロースなどはその典型的な例であろう。

【事例6】幼稚園などでクリスマスになると必ずサンタクロースが来てプレゼントをくれました。でも、サンタクロースの正体が友達のお父さんだということが分かっていたので、サンタクロースは信じていなかったと思います。(最初から信じていなかった)

【事例7】保育園の頃、園にサンタが来た時、園庭に普段見慣れない赤い車が止まっていました。郵便局のマークがあったので、毎年来るサンタは郵便局の人だったんだと気づいてがっかりしました。(小2まで)

事例6と7から示唆されるように、大人が扮装したサンタクロースとの出会いは、幼児期においてサンタクロースに対する疑惑を生じさせる大きな要因の一つとなりうる。しかし一方で、事例6の学生は「偽物と分かっている、サンタクロースが来てくれるとうれしかった」、事例7の学生は「でも、テレビでヨーロッパかどこかにいるサンタさんが映っていて、外国には本物のサンタさんがいるんだと思って、また希望が持てた」とも述べており、大人が扮装したサンタクロースとの出会いは、必ずしもサンタクロースへの不信を生じさせる決定打とはならないようである。このことは別の学生による「『サンタは先生がやっているに違いない！』と思っていたら、先生が全員いる前でサンタが現れたので、感動した」(小3まで)という記述

からもうかがえる。

子どもは幼児期の終わりまでには、クリスマス会などで出会うサンタクロースを「本物」ではなく「偽物」と判断するようになるが（富田，2009）、そのことはそのまま実在の否定へとつながるわけではなく、「本物はどこかにいる」というように、より論理的に筋道を立てながら「本物」を希求する心へとつながっていく（富田，2002）。同時に、物事の「本物らしさ」の側面により敏感になる時期であり（富田，2003）、親をはじめとする大人はそうしたこの時期の発達の特徴をよく理解したうえで、環境設定や言葉かけを行っていく必要があると言えよう。

矛盾の見破り：子どもは幼児期の終わりから児童期中頃にかけて、現実的で科学的で合理的な思考を次々と身に付け、ついにはサンタクロース神話をめぐる様々な矛盾にも疑いの目を向け、それを見破るようになる。例えば、プレゼントの隠し場所やプレゼントの包み紙に対する発見や気づきはその典型的な例であろう。

【事例 8】小3の12月24日の昼間、クローゼットを開けたらプレゼントが3個隠してあった。しかもトポスのビニール袋の中にラッピングして入れてあった。これで疑問を持ち始めて、小4の12月24日に、今度はこうざん屋のお兄さんが「クリスマスのプレゼントで一す！」と言いながら配達してきて、夢は崩れた。（小4まで）

【事例 9】小2のクリスマスの何日か前に、何気なく押入れを開けてみるとおもちゃが入っていた。変だと思いお父さんに理由を聞いてみると、「これはね。サンタさんが他の子どもにあげるプレゼントで、預かってくれと頼まれて置いているんだよ」と言われた。その時は「そうなんだ」と信じていたが、クリスマス日に朝起きるとそのプレゼントが枕元に置いてあったので、サンタクロースは親だったということを知った。（小2まで）

【事例 10】仕事から帰ってきた父が、私と弟に「今、帰ってくる途中にサンタとあって、プレゼントを預かってきた。サンタはたくさん回らんといけんから、預かってきたけ、車に行っておいで」と言いました。車に行ってみたら私と弟の分が置いてあって、そのプレゼントは知っているお店の袋に入っていました。それを見て「いない」と気づきました。（小2まで）

サンタクロースからのプレゼントは、サンタクロース神話を支える最も有力な物理的証拠の一つである。

このことは本研究においてプレゼントに関する記述が最も多く見られたことからもうかがえる（74名中59名、80%）。子どもの手元に贈り届けられたプレゼントが確かにサンタクロースからのものであることを保証するポイントはいくつか考えられるが、主には次の2点が挙げられよう。①プレゼントはクリスマス・イヴの夜に密かに子どもの枕元に置かれ、翌朝目を覚ました子どもによって発見される。②プレゼントはサンタクロースが自ら用意していることから、子どもの知る店の包み紙ではなく、サンタクロース独自の包み紙が使用されている。従って、これらに何らかの違反が見出された場合、サンタクロースの存在証明としてのプレゼントの価値は大きく揺らぎ、子どもはサンタクロースに対して疑惑や失望、悲しみや怒りを生じさせることとなる。

事例8~10は、これらの違反の例である。プレゼントの隠し場所や包み紙に関する見破りが、子どもにおけるプレゼントの神秘的価値を大きく減退させるものであることがうかがえよう。親の立場からすれば、子どもによるこれらの見破りは予測困難で回避しにくい事柄かもしれない。とは言え、この時期の論理的思考力と懐疑主義の高まりを考慮に入れるならば、子どもによるそうした矛盾の見破りは予測の範囲内とも言え、子どもに絶対見つからないような場所に隠す、お店の袋から別の袋へと移し替えるなど、見破りのリスクを回避すべく対策を練っておくことも必要であろう。

他方、夜中に枕元にプレゼントを置くところを偶然見られるなど、親としてはさらに回避困難な事例も見られる。事例11はうまく回避したケースであり、事例12は回避できなかったケースである。

【事例 11】小学1年生の頃、サンタクロースに手紙を書いて枕元に置いて寝た。寝ていたらプレゼントを置く音が聞こえてきて、「サンタさんだ！」と思ってすぐ目を覚ますと誰もいなくて、プレゼントとサンタからの手紙が置いてあり、その時私はサンタさんは私たちには見えないんだと思った思い出がある。（小2まで）

【事例 12】クリスマスの日はずっと朝目が覚めると枕元にたくさんのお菓子の入った袋がありました。しかし、小2くらいの時になぜか夜中に目が覚め、父がいつものお菓子の袋を置いているのを見てしまいました。ショックとかではなく、「お父さん、ごめんなさい」と思いました。（小2まで）

サンタクロースがプレゼントを置く瞬間を見たいと思うのは子ども時代の避けがたい誘惑であるが、大抵

は睡魔に襲われて未遂に終わり、見事成功したケースは極めてまれである。しかし、そのまれなケースでしばしば悲劇は生じるものであり、事例 12 はまさにそうしたケースと言えよう。

他にも、サンタクロースへの手紙やその後のやりとりを通じて矛盾の見破りが生じたというケースも多く報告されている。手紙に関する記述はプレゼントに関する記述に次いで多く見られ、74 名中 21 名 (28%) において確認された。事例 13 はその一例である。

【事例 13】 クリスマスにはサンタさんに手紙を書き、チョコレートと一緒に枕もとにおいて寝ていました。朝起きたら、手紙がなくなっていて、代わりにプレゼントが置いてありました。うれしくてずっと信じていたのですが、ある日、お母さんたちのタンスを見ていたら、奥の方からサンタさんに書いたはずの私の手紙が出てきました。

最初は、なんでサンタさんに書いたものをお母さんが持っているの！という怒りでいっぱいでしたが、お母さんと話しているうちにサンタさんはお母さんたちだったのだと分かり、大泣きをしました。そうしてサンタさんはいないということを知ったのですが、それでも心のどこかでずっと信じていました。(小 4 まで)

この時期の論理的思考力と懐疑主義の高まりを考慮に入れると、こうした発見の可能性も決してないわけではなく、その点を考えると先述の隠し場所などのケースと同様に、親の危機管理能力が問われるケースと言えるかもしれない。しかし、手紙そのものの価値に注目すると、それ自体はサンタクロースの存在に対する信念を高める大きな要因となり得るようである。

【事例 14】 私は小学生の頃、よくサンタさんに手紙を書いていました。「○○が欲しいです。無理だったら○○でいいです」とか書いていました。小学 4 年生くらいになると、テレビや友達から「サンタは親だ」と聞かされるようになり、本当にいるのか微妙になってきて、サンタさんに手紙を書いて、返信用の紙も一緒に入れて、「返事を下さい」と書きました。そしたら、ちゃんと返事があり、字は日本語で書いてあったけど、震えた字で、日本語が難しい感じで書かれていました。苦手みたいで、短い文しか書いてありませんでした。これは結構うれしくて、信じました。次の年、また疑いがある、また同じように手紙を書いて、今度は読めなくてもいいからサンタさんの言葉で書いてくださいと頼みました。すると、起きたらちゃんと返事が置いてあって、全部英語で、しかも筆記体で書かれてあり、「うわあー」って思いました。それでかな

り信じました。この年くらいになると、クラスでもサンタさんが来る人は少なく、まだ来ているというのが自慢でした。あと、何度かクリスマスの日とかに家中プレゼントを探し回ったことがあるけど、見つけたことはありません。(今でも信じている)

【事例 15】 毎年サンタさんに手紙を書いていました。ある年、私はずっと前から犬を飼いたかったのですが、手紙に「犬をください」と書きました。すると、朝起きたら返事の手紙が置いてあり、「私はとても寒い国から来るので、運ぶ途中に犬は死んでしまうかもしれません。なので、犬はあきらめてね」と書いてあって、隣に他のプレゼントが置いてありました。私はとても納得して、他のプレゼントでもがっかりしなかったのを覚えています。(小 4 まで)

事例 14 と 15 からは、サンタクロースを信じる子どもの心に親がいてねいに寄り添い、応答している様子がうかがえる。こうしたやりとりは子どもにおいて単にサンタクロースに対する信念を強化する働きを持つだけでなく、安心や信頼、大切にされているという感覚を養うことにもつながると考えられる。

他方、サンタクロースを信じる子どもの心に親が寄り添わなかったために、子どもに大きな失望と悲しみを生じさせた親子のやりとりのエピソードも報告されている。

【事例 16】 私がまだサンタはいると心の中で信じていた頃、母や父に「クリスマスは○○が欲しいなー」と話していました。クリスマスの日、目を覚ますと枕の横に大きな袋があって、すごく大きなプレゼントだと思い開けようとする、中にはこんにゃくゼリーの袋が丸ごと入っていました。当時、よくきょうだいでゼリーの取り合いをしていたので、母が一人ひとりに買ったと言っていました。それを聞いて、やっぱりサンタはいないんだなとショックを受けたのを覚えています。(小 3 まで)

【事例 17】 ずっと信じていたが、プレゼントはもらったことがなかった。小学生くらいの時に諦めかけていたら、友達が英語で書かれた手紙をサンタからもらったと言って見せてきて、それでまたサンタへの思いが出てきた。次の年、ベッドの横に靴下の形をした袋をかけておいて、朝見たらお母さんからの手紙と 1 円玉が入っていて、「これがサンタからのプレゼントだ」というようなことが手紙に書かれていた。それ以来、サンタへの思いは消えた。(小 4 まで)

幼児期の終わりから児童期中頃にかけて、子どもは

確かにサンタクロースの数々の矛盾に目を向け、いくつもの見破りを経験するようになるが、そうして疑いの目を持つ一方で、この時期はサンタクロースを信じようとする心も持ち、揺れ動いているのもまた事実である。大切なことは、親をはじめとする大人がそうした子どもの揺れ動く心にていねいに寄り添い、誠実に対応することではなからうか。事例16と17はそのことを改めて感じさせてくれるエピソードと言えよう。

他者の証言

大人による扮装物を除いて、子どもがサンタクロースを直接経験することは皆無である。子どもはプレゼントや手紙など間接的に得られる証拠をもとに、サンタクロースの存在に対する信念を形成していくが、そうした間接的証拠群のうち、恐らくプレゼントや手紙に次いで効力を発揮するのが他者の証言であろう。例えば、最近の研究においてHarris, Pasquini, Duke, Asscher, & Pons (2006)は、5-6歳児にサンタクロースや歯の妖精などの社会・文化的に広く実在が信じられている空想的存在と細菌や酸素などの目に見えないが科学的に存在が確かめられている現実的存在について、「本当に存在するか?」「なぜそのように言えるのか?」を尋ねたところ、ともに実在-非実在を信じる根拠として直接的遭遇への言及よりも一般的概念など他者の証言への言及が多く見られたことを示している。つまり、他者の証言は直接的に遭遇することのない目に見えない存在に対する信念の形成に大きく貢献しているのである。

子どもは他者(親やきょうだい、友達など)からの様々な実在の肯定を促す証言をもとに自らの信念を強め、あるいは実在の否定を促す証言をもとに自らの信念を弱める。以下では、他者の証言がいかに子どもの信念に影響を及ぼすのかを、事例をもとに見てみよう。

【事例18】クリスマス・イヴの夜、父が2階から大きな声で、「Nくん(兄)、Hちゃん、早くおいで! サンタさんが窓から見えるよ! 早く早く!」と言って、一生懸命演技していた。私は「まさか、嘘だ…」と思いつつも、ドキドキしながら全速力で兄とともに父のところへ走っていった。すると、窓からは何も見えず、父は「何でもっと早くこんの? もうサンタさん見えなくなったよ。あともうちょっとだったのに…」と言っていた。毎年やっていたが、私は半信半疑だった。でも、とても楽しかった。(幼児期まで)

【事例19】隣の家の女の子が、「クリスマス・イヴの夜中に起きてみると、サンタさんの赤い靴がカーテンの隙間から見えた!」と次の日私に話してくれまし

た。そのことで、私も絶対サンタクロースはいると思いました。(小6まで)

事例18は親の証言が子どもの信念を強めたケースである。毎年のように繰り返される父親の「サンタクロースが見えた」発言は、子どものドキドキワクワク感を増長させ、その当時の家族の笑顔とともに喜びや幸福に満ちた記憶として子どもの中にしっかりと根付いているようである。また事例19は、「サンタクロースを見た」という友達の証言が子どもの信念を強めたケースである。「いつ、どこで、どのようにして、見た」という証言には具体性があり、子どもの信念を強めるには十分であったのかもしれない。

他方、年長のきょうだいや友達による「サンタクロースは本当はいない」発言により、それまで築き上げられたサンタクロースに対する信念がもろくも崩れ去るというケースも往々にして見られる。すでに一足先にその真実を手に入れた子どもは、その真実を周囲に対して打ち明けたいという衝動を抑えることが困難なようである。特に子どもが幼児期の終わりから児童期中頃に位置している場合、身に着けたばかりの科学的、合理的、現実的な思考や態度を周囲に対して発揮したいと願うのは、この時期特有の避け難い心性なのであろう。ひそかに胸の奥底に仕舞い込むという芸当は、彼らにとって極めて困難なのかもしれない。そうして「いない派」は自らの確信めいた証言を武器に、「いる派」を徐々に駆逐していくのである。事例20~22は、まさにそうした例である。

【事例20】年長さんのクリスマスの朝、サンタクロースがプレゼントをくれたと喜んでいたら、兄が「サンタはいない」と言い出しケンカになった。兄が「親に聞けばいい」というので親に聞いたら、兄が怒られていた。次の年から、クリスマス・プレゼントはおもちゃ屋さんで直接選ぶようになった。(幼児期まで)

【事例21】小学4年生の頃、小学6年生になった姉が、母親に「実はサンタはいない」と秘密で教えてもらいました。私と妹にはそのことを言わないようにと言われていたのに、姉はその5分後には私にそのことを言いました。私と姉はクリスマス前に母が掛っているプレゼントを探しました。私はしばらくサンタはいると信じているふりをしました。(小4まで)

【事例22】幼稚園の時は友達とサンタクロースの話をよくしていた。「いない」という子はいなかったように思う。小学生になると「いる」という子と「いない」という子に分かれた。私はいると思っていたけ

ど、「いないのかなあ」と考え始め、だんだん信じなくなっていく。(小1まで)

このように年長のきょうだいや友達の証言は子どもの信念を打ち崩す上で強力な武器となり得るが、それ以上に強力な武器として親による証言がある。親による証言は大きく次の3つに分けられる。①子どもがある程度の年齢になったら真実を伝えるという直接的かつ意図的な証言提供のケース。②親の側に真実を伝える気は全くなかったのに、うっかり伝えてしまったという偶発的な証言提供のケース。③子ども自身が自然と真実に気づくことができるよう環境を整えるという間接的かつ意図的な証言提供のケース。①のケースは、その前提としてすでに年長のきょうだいや友達からそのような証言を得ていたり、あるいはプレゼントや手紙における矛盾点の見破りの体験を経ているケースがほとんどであり、親の直接的かつ意図的な証言提供のみを報告した事例は、今回の調査では見られなかった。従って、ここでは②と③に関するエピソードのみを紹介する。事例23は②、事例24と25は③のエピソードである。

【事例23】 小学2年生のクリスマス・イヴの日に、普段は夜外に出ることはない母が、「ちょっと買い物に行ってくる」と言って出掛けて行った。次の日、手袋とお菓子の詰め合わせが枕元に置いてあった。前日の母の様子を疑いながらも、やっぱりサンタさんはいるのだと思った。それから一週間くらいたって、母とデパートに買い物に行った時、とてもかわいい手袋があったので、「これ買って」と言うと、母が「この前お母さんが買ってあげたのがあるでしょ」と言った。そこでサンタはいなかったのだということが分かった。(小2まで)

【事例24】 3年生くらいから、親と一緒にプレゼントを選びに行って、すぐその場で買ってもらえるようになりました。それで今までのプレゼントは全部お母さんたちだったのかなと思うようになり、信じなくなりました。(小2まで)

【事例25】 中学生までは、毎年25日の朝起きたら、部屋のどこかにプレゼントが置いてありました。高校生になると、封筒にお金が入っていて、自分で好きなものを買いなさいと言われてきました。中学生の頃くらいから、「サンタさんは親なんだ」と気づき始めましたが、それでもずっとプレゼントがよかったです。(中学まで)

クリスマスはお正月と時期的に近く、親の立場から

してみると、プレゼントにお年玉にとずいぶんこの時期はお金がかかるという意識もあるかもしれない。事例23のように、子どもの何気ない要求に対して、つい「この前買ってあげたでしょ」という言葉が口について出てしまったのは、そうした意識も背景にあったと考えられる。また、この時期は親側の金銭的事情から、お年玉はあげるけれどクリスマス・プレゼントは我慢してもらおうという方針の家庭もあるようで、そうした事例を報告する者もいた。さらには、12月や1月が誕生日の場合には、すべてが誕生日プレゼントに集約されてしまうというケースもあるようである。

子どもが大きくなるに従って、クリスマス・プレゼントを選ぶことも次第に困難になってくる。かつては子どもの要望を密かに聞きながらも、親として子どもに与えたいものもあり、そうした子どもの要求と親の要求とをうまく調停しながら、何とか互いにある程度納得のいくプレゼントを選択してきたのであるが、子どもの成長に従ってそれも次第に困難になっていく。子どもの要求と親の要求とは乖離していき、ときに親の当初の予算範囲を超えた高額な要求も示されるようになり、親の頭を悩ますようになる。事例24や25のように、サンタクロースが本当は親であることを暗黙裡に打ち明け、一緒に買い物に行くことにしたり、代わりに金銭を与えるようになるのは、「そろそろサンタクロースが夢見させてくれた空想世界ともお別れの時期」という親側の発達をめぐる判断に加えて、このような実際的な問題も理由としてあるように思われる。

「サンタクロースは本当はいない」という真実を知った時、子どもは怒りや悲しみ、憤りなど様々な感情的反応を示す。そのことはこれまで紹介した事例の内容からもうかがえよう。大切なのは、その時その瞬間の反応ではなく、その後それをどのように意味づけ、振り返るかであると考えられる。クリスマスという一大イベントに登場するサンタクロースという架空の存在に対して、自分やまわりの大人はどのように向き合ってきたのか、どのように向き合わせてくれたのかを振り返って考えることである。そこにこそ子ども時代のサンタクロース体験がもたらす深い意味が潜んでいるのではなかろうか。最後に、事例26を紹介してこの節を締めくくることがとする。

【事例26】 クリスマスの朝には、起きたら枕もとにプレゼントが置いてあったけど、いつからか来なくなった。はじめは大きくなったから、もう子どもじゃないから、プレゼントがこなくなったんだと思った。弟が2歳下にいるけど、そのとき弟にはまだプレゼントが来ていた。小学校3年か4年頃に妹ができて、はじめて、親がプレゼントを買っていたことを知った。

それまでは本当にサンタクロースがいると思っていた。手紙も出して、本当にどこから返ってきたのか知らないけど、返事が来ていた。メロディーのついたカードで、信じていた頃はそれを見て「本当にいるんだ！」と思っていた。今はもう、妹をだますわけじゃないけど、夢を持つことは大切だと思うので、一緒に「サンタクロースはいるんだよ」と信じているふりをしている。サンタはいないんだと思っている今でも、なぜかサンタからきたカードは大切にとってある。不思議だなあ。でも別に、サンタを信じていない子に、無理やり信じさせなくてもいいんじゃないかと思う。子どもが信じる信じないは自由だと思うから。(小4まで)

結 論

本研究では、子どもはなぜサンタクロースを信じ、やがて信じなくなるのかについて、大学生を対象とした回想的な質問紙調査により得られた事例をもとに考察を行った。その結果、以下のことが示唆された。

子どもは幼児期の間にサンタクロースからのプレゼントという物理的証拠をもとに、サンタクロースは確かに存在するという信念を形成していく。プレゼントはときにビッグ・サプライズとともに手元に届いたり、その中身は誰にも内緒にしていた今まさに欲しいものであったり、努力や祈りの過程がプレゼントという結果へと結びついていたり、そうした出来事の数々を子どもはサンタクロースの仕業として受け止め、それにより超自然的な力を持つ行為者としてのサンタクロースの概念をより明確にしていく。大人が扮装したサンタクロースとの出会いにより信念の揺らぎも経験するが、「それは本物ではなく偽物であり、本物はどこか遠くにいて自分のことを見守ってくれている」と考えることによって、その問題も解決される。

幼児期の終わりから児童期中頃にかけて論理的思考力や懐疑主義を身に着けるようになると、子どもはこれまで棚上げにしていた数々のサンタクロース神話をめぐる矛盾点に改めて疑いの目を向け、それらを見破るようになる。プレゼントの隠し場所や包み紙に関する見破り、プレゼントを置く瞬間の目撃、サンタクロースが受け取ったはずの手紙の発見、手紙やプレゼントの中身に対する疑惑などが引き金となり、子どもは次第にサンタクロースの存在を信じなくなる。その一方で、サンタクロースを信じようとする心も併せ持っており、子どもの心は両者の間を揺れ動いている。従って、親をはじめとする大人がそうした子どもの揺れ動く心にていねいに寄り添い、誠実に対応することがこの時期大切なこととして考えられる。

親や年長のきょうだい、友達からの証言もまたサン

タクロースに対する不信に拍車をかける。他者に先行して真実を知り得た子どもは、まだ真実を知らない者に対してそれを打ち明けたくてたまらなくなる。論理的思考力や懐疑主義を身に着けたばかりの子どもにとって、それは抑えがたい衝動なのかもしれない。特に親による証言は子どもにとって決定的な証拠となり得る。「サンタクロースは本当はいない」という真実を知った時、子どもは怒りや悲しみ、憤りなど様々な感情的反応を示すが、大切なのはその後その体験をどのように意味づけ、振り返るかである。そこにこそ子ども時代のサンタクロース体験がもたらす深い意味が潜んでいると考えられる。

文 献

- Baxter, J. M., & Sabbagh, M. A. (2003). Young children's questions about Santa Claus: A preliminary analysis. *Poster session presented at the Cognition Development Society Conference, Park City, UT.* (cited. Woolley, J. D., & Cornelius, C. A. (2012). Beliefs in magical beings and cultural myths. In M. Taylor (Eds.), *The Oxford handbook of the development of imagination* (pp.61 – 74). New York: Oxford University Press.)
- Bering, J. M. (2012). ヒトはなぜ神を信じるのか：信仰する本能（鈴木光太郎、訳）東京：化学同人。（Bering, J. M. (2011). *The belief instinct: The psychology of souls, destiny, and the meaning of life.* New York: W. W. Norton.)
- Bering, J. M., & Parker, B. D. (2006). Children's attributions of intentions to an invisible agent. *Developmental Psychology*, 42 (2), 253–262.
- Carrick, N., & Quas, J. A. (2006). Effects of discrete emotions on young children's ability to discern fantasy and reality. *Developmental Psychology*, 42, 1278–1288.
- Carrick, N., & Ramirez, M. (2012). Preschoolers' fantasy-reality distinctions of emotional events. *Journal of Experimental Child Psychology*, 112, 467–483.
- Harris, P. L., Pasquini, E. S., Duke, S., Asscher, J. J., & Pons, F. (2006). Germ and angels: The role of testimony in young children's ontology. *Developmental Science*, 9, 76–96.
- Kowitz, G. T., & Tigner, E. J. (1961). Tell me about Santa Claus: A study of concept change. *Elementary School Journal*, 62, 130–133.
- Prentice, N. M., Manosevitz, M., & Hubbs, L. (1978). Imaginary figures of early childhood: Santa Claus, Easter Bunny, and the Tooth Fairy. *American Journal of Orthopsychiatry*, 48, 618–628.
- Prentice, N. M., & Gordon, D. A. (1986). Santa Claus and the Tooth Fairy for the Jewish child and parent. *Journal of Genetic Psychology*, 148, 139–151.
- Rosengren, K. S., Kalish, C. W., Hickling, A. K., & Gelman, S. A. (1994). Exploring the relation between preschool children's magical beliefs and causal thinking. *British Journal of*

- Developmental Psychology*, **12**, 69–82.
- Samuels, A., & Taylor, M. (1994). Children's ability to distinguish fantasy events from real-life events. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 417–427.
- Taylor, B.J., & Howell, R.J. (1973). The ability of three-, four-, and five-year-old children to distinguish fantasy from reality. *Journal of Genetic Psychology*, **122**, 315–318.
- 富田昌平. (2002). 実在か非実在か：空想の存在に対する幼児・児童の認識. *発達心理学研究*, **13**, 121–134.
- 富田昌平. (2003). 子どもにとっての「本物らしさ」を探る. *発達*, **95**, 34–41. 京都：ミネルヴェ書房.
- 富田昌平. (2009). 幼児におけるサンタクロースのリアリティに対する認識. *発達心理学研究*, **20**, 177–188.